

(略)

<国譲り>

大国主命から天照大神へ

大国主命は、「国作られし大神」などと呼ばれる。大和朝廷では五世紀ごろまで、大国生命がもっとも権威ある神とされていた。その時期の王家は、三輪山(奈良県桜井市)の大物主神おおものぬしのかみを王家の守り神としていた。

最初、大物主神は、大国主命と同一の神だったという。大国主命は、多くの名をもっていたと伝えられている。王家がまつた三輪山の神は、現在は大神おおみわ神社の祭神となり、多くの参拝者をあつめている。

また九五世紀の時点では、大国主命を守り神としてまつる地方豪族が多かった。かれらは、自家と王家とは対等だと考えていた。そして**六世紀はじめに王家が自家を地方豪族の上位におくために、天照大神を自家の祖先とした**。このことは大和朝廷の歴史を知るうえで見落とせない、重要な転換である。

大国主命を「国作られし大神」とする発想が、日本全国に広がった。そのために六世紀に王家は、「大国主命から皇室(王家)の祖先への国譲りの物語」を必要としたのである。国譲りによって、天照大神が大国主命の上位におかれた。そして天照大神に従う神々が「天神あまつかみ」、大国主命ゆかりの神々が「天神」より格下の「国神くにつかみ」とされた。

(略)

<天孫降臨>

山上の穀霊

大国主命は国譲りにあたって、次のことを求めた。

「私に対して皇祖神と同等の祭祀を行なうように」

そのために古代の皇室は、天照大神をまつる伊勢神宮と大国主命を祭神とする出雲大社をもっとも重んじた。

(略)

<神武東征>

東方への長い旅

(略)

磐余彦は、賢く決断力のある人物であった。かれは「このまま日本の西の外れにいても、日本の国を統一できない」と考え、三人の兄に本拠を大和に移そうと提案した。兄たちも、この意思に従った。

(略)

<神武天皇の大和平定>

熊野で再生する

磐余彦の一行は、大阪湾沿岸の白肩津しらかたのつ(大阪府東大阪市)に上陸した。かれらはそこから、生駒山を越えて大和に入ろうと考えたのだ。

ところが長髓彦という大敵が、磐余彦の前に立ちはだかった。この長髓彦は、天から降った饒速日命に仕えていた。饒速日命は、瓊々杵尊と同じく天忍穗耳尊あめののおしほみみのみことの子であると伝えられる。かれは高天原の生まれだが、天照大神から地上の支配権を委ねられてはいなかったとされる。「天孫を大将とする」二つの軍勢の間で、激しい戦いがおこった。このとき磐余彦は大敗し、磐余彦の兄の五瀬命は矢傷を負ってしまった。

このあと磐余彦は、紀伊半島の南端を迂回して南方から山を越えて大和に入ろうとした。ところが熊野にむかって航行するなかで、五瀬命だけでなく、他の二人の兄も亡くなった。しかも一人になった磐余彦は、熊野に着いたときに疲れきって倒れてしまった。

このとき、高天原から助けがきたという。天照大神の命令をうけた武甕槌命たけみかづちのみことが、磐余彦に師霊ふつのみたまという神剣を贈ったのだ。神剣を得た磐余彦の一行は元気を回復して、古野を経て奈良盆地(大和の中心部)にむかった。

この部分は、「磐余彦は熊野で死の縁からよみがえった」と説かれているものだ。古代の大和朝廷の人びとは、熊野につよい霊力をもつ神々がいると考えていた。この信仰がもとになって平安時代末以降に、熊野三社(和歌山県)の信仰が繁栄する。

長髓彦と物部氏

磐余彦は、大和の諸勢力を従えたのちに、長髓彦という大敵と対決した。このとき高天原から金の鵄が来て磐余彦の弓弭ゆはず(弓の両端の弦をかけるところ)にとまった。すると長髓彦の家来たちは、鵄が放つ光にあたって戦意を無く

して敗れたという。

このあと饒速日命が、長髓彦を殺して磐余彦に帰従した。饒速日命は物部氏の祖先神である。王家はこの縁によって、物部氏に石上神宮で訶霊ふつのみたまをまつらせるようになったと伝えられる。

石上神宮は、悪い靈魂を退けて王家を守る役目をもつ神社である。そして長髓彦はもとは、王家と対立する東北地方や関東地方の勢力がまつる神であった。王家を呪力でまもる物部氏の役割から、物部氏の祖先が長髓彦を殺したとする話がつくられたのであろう。

#### <欠史八代>

二人の「はつくにしらすすめらみこと」

『日本書紀』などは、大和を平定した磐余彦が橿原宮（奈良県橿原市）で即位したと記している。これによって、初代の天皇である神武天皇が誕生したという。

しかし神武東征伝説のなかみは、神話風で不確かである。それは、こういったものにすぎない。

「王家が物部氏祖神おやがみの力をかりて、長髓彦という悪神を倒した」

ゆえに十代目の天皇（大王おおきみ）とされる天皇が最初の大王ではなかったかとする説も出されている。次項に記すように、崇神天皇の業績は最初の大王にふさわしいものだからである。

しかも神武天皇にも、崇神天皇にも「はつくにしらすすめらみこと」のおくり名が捧げられている。「はつくにしらすすめらみこと」とは、文字通りに「初めて国を治めた天皇」を意味する称号である。

#### 謎の八人の大王

王家の古い系図は、崇神天皇に始まるものではなかったろうか。しかも崇神天皇が実在の人物であることは、ほぼ間違いない。崇神天皇の実名「みまきいりひこ」に始まる王家最古の系図は、遅くとも五世紀末には完成していたろう。

しかし王家の権威を高めるために、「王家の起源をより古いものにしたい」と考えた大王がいた。かれの指導のもとに、半分神々の世界に足をふみ入れた神武天皇の始祖の物語が創作された。

神武天皇と崇神天皇との間をつなぐ、八人の大王の名前は、そのときにつくられたのではあるまいか。ただし欠史八代の大王が、すべて架空の人物というわけではない。

三代目の安寧天皇の実名の中の「玉手見たまでみ」や、四代目の懿徳いとく天皇の名前の「鋤友すきとも」などは、四世紀の人名にふさわしい古いひびきのものである。四世紀に、実在した系譜関係の明らかでない王族名を、欠史八代の形に整理したのだろうか。

欠史八代の大王の陵墓は、古代に飛鳥、葛城と呼ばれた範囲に集中している。そこは蘇我氏の勢力圏である。この点からみて、神武東征伝説や欠史八代の系譜が整えられた時期は六世紀後半から七世紀前半の蘇我氏全盛期である可能性が高い。

#### <継体天皇と三輪山の祭祀>

王家に欠かせない祭祀

**大和朝廷の性格は六世紀はじめの継体天皇の時代を境に大きく変わる。この転換以前の王家は、「地方豪族の連合の指導者」と評価するのがよい。**

**これに対して王家は、六世紀はじめ以後に「日本の唯一の君主」を目指して行動した。**

六世紀の転換より前の王家は、神の山とされた三輪山と関わっていた。大王の豪族連合の指導者としての地位を保証したのが、大物主神の祭祀であった。それが大和朝廷の本拠地、纏向遺跡のそばの三輪山で行なわれていたのだ。

(略)

三輪山の周辺

(略)

日本全国各地に、大国主命を祭神とする古代以来の有力な神社が分布する。大国主命は大物主神と同一の神とされるが、日本神話は大物主神は大國主命を護る神で、大國主命より格の高い神であると記している。

四、五世紀に大和朝廷に従った地方豪族が、大國主命をまつっていた。王家はそのような全国に広がる大國主命の祭祀の指導者として、地方豪族を束ねていた。崇神朝に、大物主神の祭祀が始まったとされる。このことは、皇室の祖先が「大王」と呼ばれるのにふさわしい地位を得た時期であることを物語っている。

(略)

<この文書は、「**生駒の神話**」(下記 URL をクリック) に掲載されているものです。>

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>